

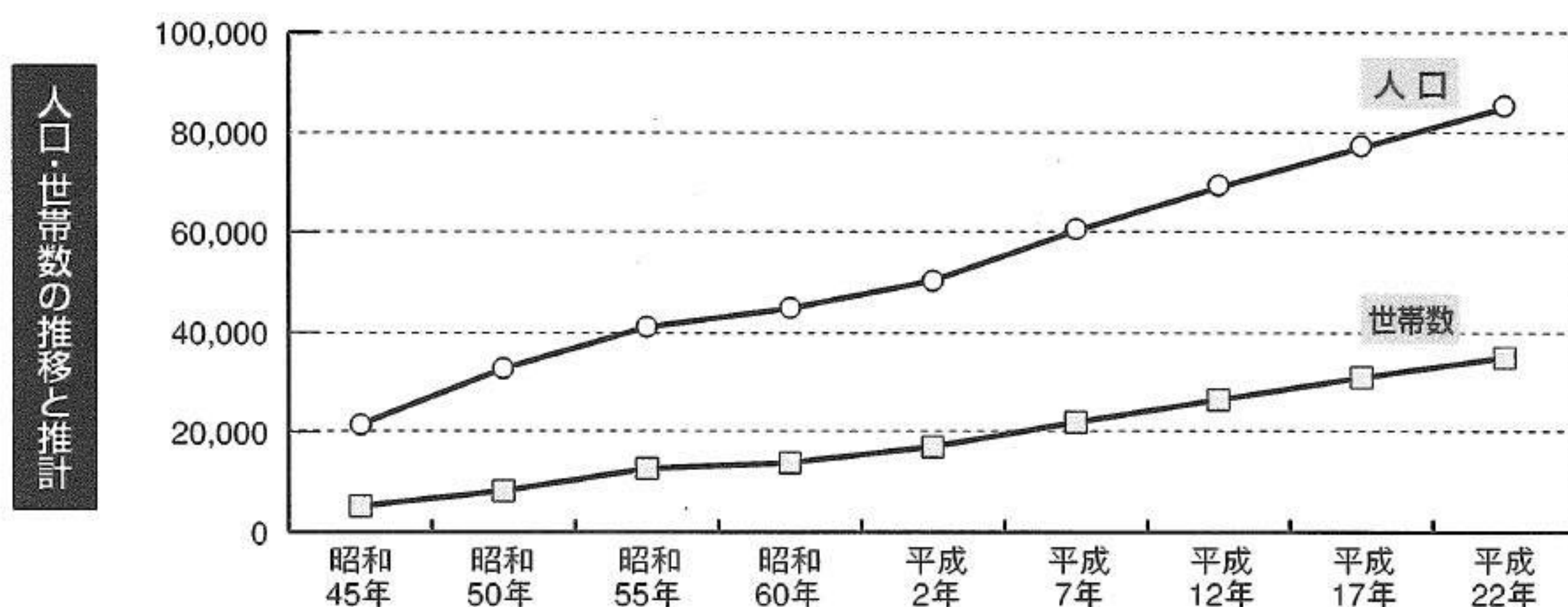
5 計画の指標 (将来のごみ量予測、数値目標設定のための基礎データ)

1. 将来人口及び世帯数

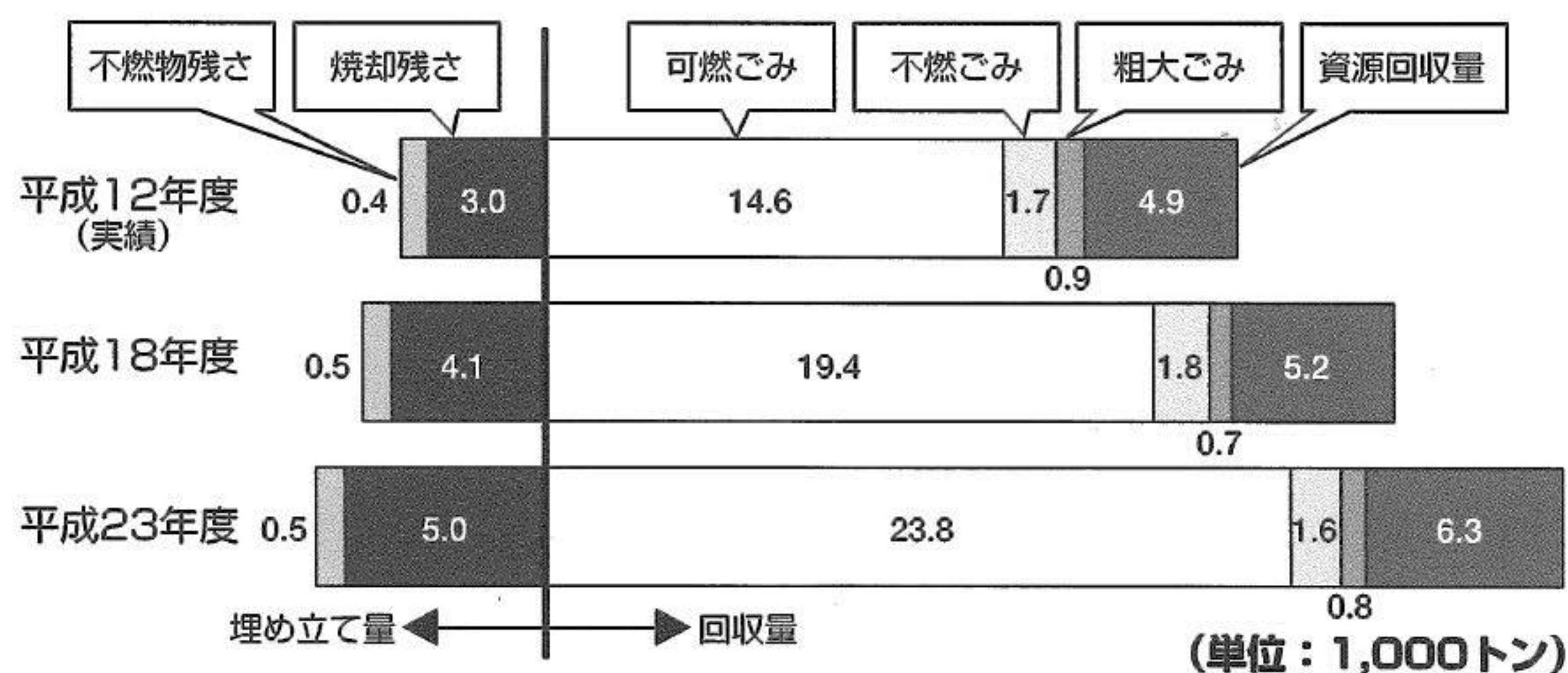
今後5年で12%、10年で24%の人口増加率が見込まれています。日本の人口増加率は最近5年で1.1%（平成7年～平成12年：国勢調査）と戦後最低。急激な人口増加率となっています。

第4次総合計画に基づき、計画目標年次である平成23年度の人口として86,600人、世帯数として35,800世帯を想定します。

年度(平成)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
人口	68,741	70,600	72,200	73,800	75,400	77,000	78,600	80,200	81,800	83,400	85,000	86,600
世帯数	24,911	27,400	28,300	29,200	30,100	31,000	31,800	32,600	33,400	34,200	35,000	35,800
世帯あたり 人員	2.76	2.58	2.55	2.53	2.50	2.48	2.47	2.46	2.45	2.44	2.43	2.42



2. ごみ量の推計 (特に手だてをうたない場合)

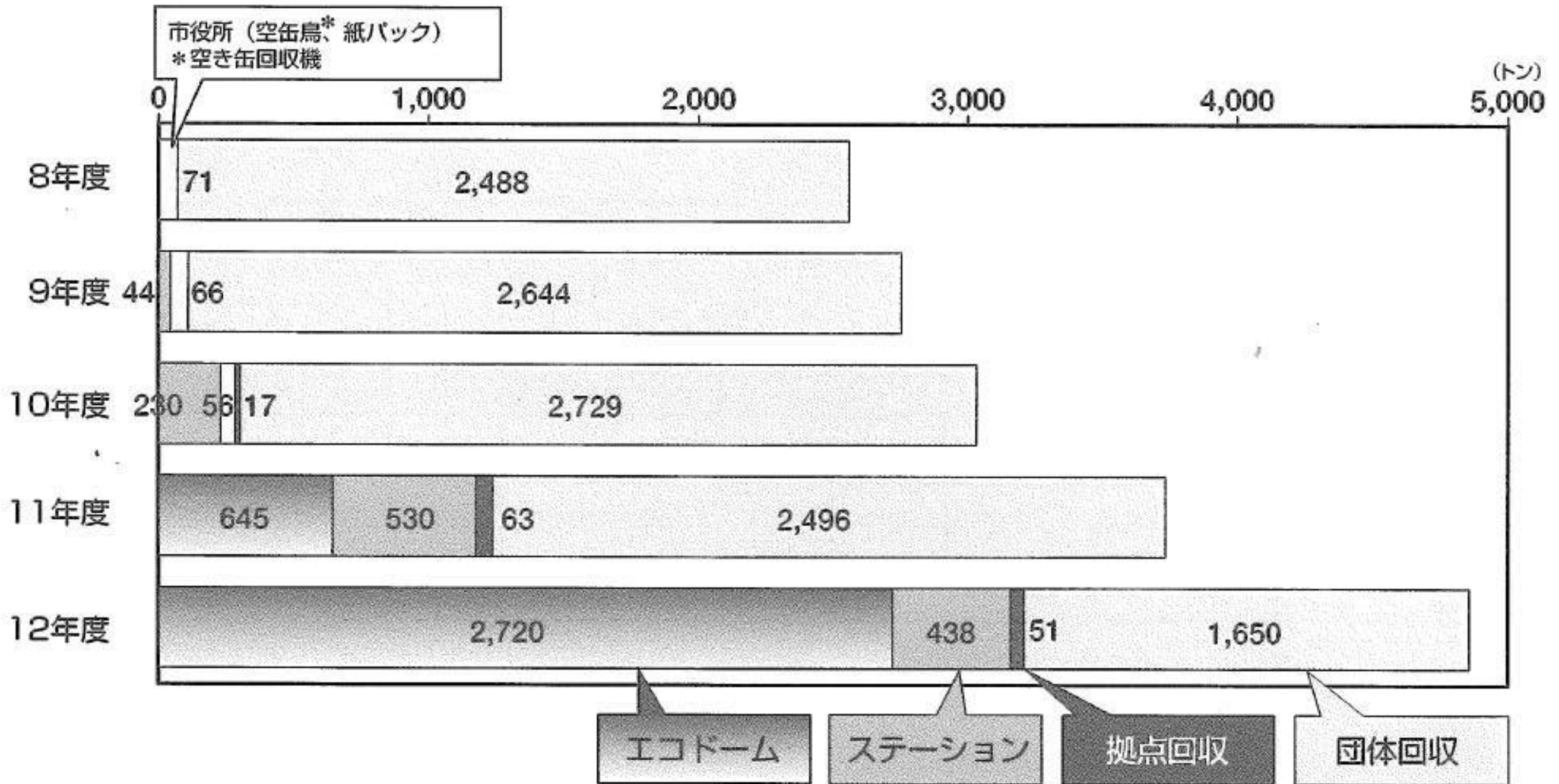


○平成23年度のごみ量（可燃物、不燃物、粗大ごみ）は平成12年度に比べて人口・世帯数の増加により約50%増加することが予想されます。人口が26%、1人1日あたりのごみ量が20%増加すると予測されます。

○ごみ量に資源回収量を加えた総排出量も47%ほど増加することが予測されます。

PART2

3. 資源回収の現状

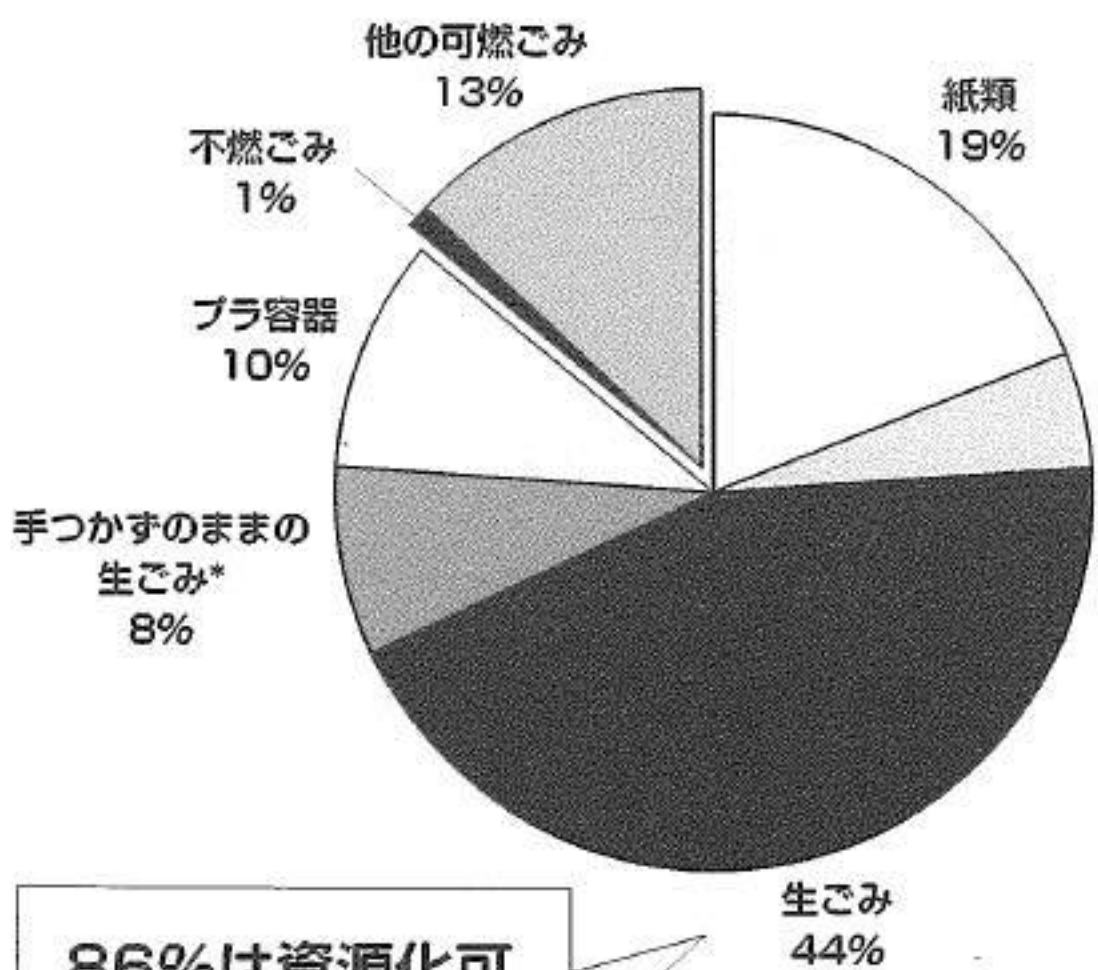


- 平成11年度に始まったエコドームでの資源回収は、大変大きな成果を上げています。平成12年度には資源回収量全体の6割近くもの資源がエコドームで回収されています。
- ステーション回収、拠点回収は一定の成果をあげていますが、今以上に資源が集まりやすい状況をつくる必要があります。
- 団体回収では安定的な資源回収量で推移してきましたが、平成12年度に前年度に比べて33%も資源回収量が減っています。一部エコドームにシフトしたことも考えられますが、他の理由があれば対策を急ぐ必要があります。

4. ごみの性状

組成調査

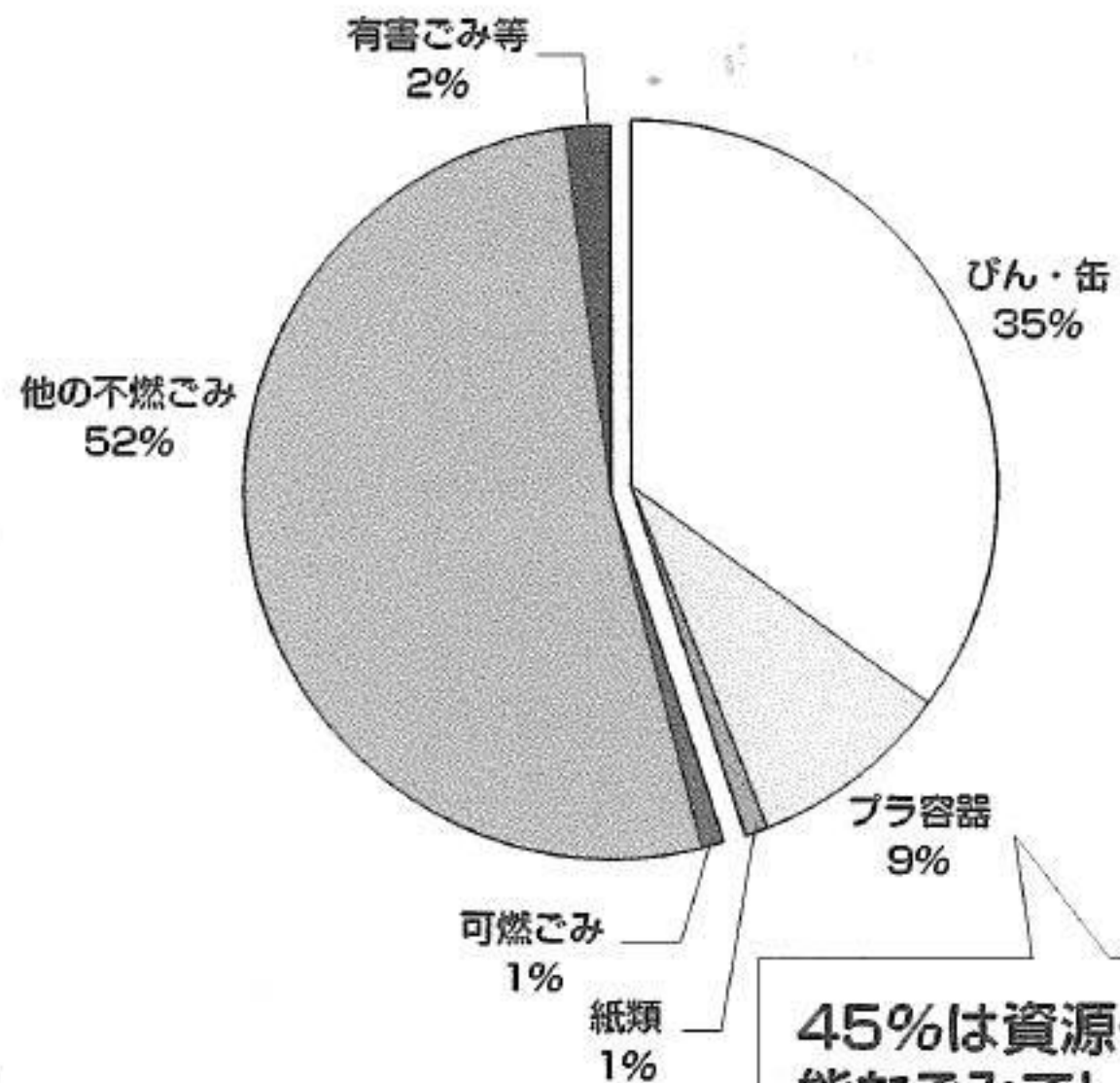
可燃ごみの組成



86%は資源化可能なごみでした

*手つかずのまま生ごみ：商品のまま手をつけられていない生ごみ。そのままの野菜や開封されていない加工食品など。

不燃ごみの組成



45%は資源化可能なごみでした

5. 市民の意向

市民の意見や要望を最大限計画に反映するために、市民アンケートを実施しました。ポイントと思われる調査結果を示します。

項目	質問事項	回答	
プラスチック製容器包装について	ステーション回収を実施したほうがよい	74%	質問事項に そう思うと 答えた市民 の割合
エコドームについて	増やしたほうがよいと思う	61%	
生ごみの資源化について	情報やきっかけがあれば取り組んでみたい	57%	協力したい 36% できれば 協力したい 41%
	モデル地区になったら生ごみの分別排出に協力したい	76%	
レジ袋、計画的購入などについて	レジ袋を断れない理由は「つい忘れてしまう」から	49%	
	食品を捨てないように計画購入できない理由は「つい忘れてしまう」から	82%	
最終処分場について	将来民間処分場などに依存した場合多額の費用が必要になるかもしれないということは仕方がないと思う	55%	非常に 14% やや 41%
	自分たちの地域で埋め立てるのが望ましいと思う	57%	非常に 20% やや 37%
	環境基準を十分に満たしていれば市内に設置するのも仕方がないと思う	71%	非常に 24% やや 47%
	埋め立てごみを減らすためなら面倒な分別や保管の手間も仕方がないと思う	93%	非常に 55% やや 38%

※四捨五入のため、合計が一致していないところがあります。